

電話での相談。

「小学四年の男の子です。ザリガニをとったり、カエルをとったりして遊ぶのですが、勉強となるとまるきり元気がなく、学校参観日にもさつと手をあげもせず、指名されてもぐすくすして声が小さい。成績はそう悪い方でもありませんが、これでは困ります。どうすればよいのでしょうか」

「このような場合、実際にはよくやっていることも多いので、本人に会ってみたいと言うと、それができないのです。長い間、今日こそ相談所につれて出ようと思ってきましたが、どうしてもできません。やっと思いきって電話でお願いしているのです」という。

「どこからか全くわからない、市外からかもしれない、よくあることである。住所、氏名を言わなければ絶対にわからないという安心感が、これだけのことをこのお母さんに言わせている。自分を絶対安全の場においてからという、過剰な自己防衛はどうしておこなうのだろうか。忙しいから出て行けないというのではない。ちよつとの見苦しいところを人に見せてはならないという構えが、このお母さんにはある。」

「子どもさんが登校する朝、忘れ物はないか点検したり、帰ると宿題はどんなものかなど、そばについて確かめないと気が済まないのではないですか」

「おっしゃる通りです。『食事のとき、行儀が悪いとか、食べ残しがあるなど、何か言っていないと気が済まないのではないですか』

「全くその通りです。『お母さんも小さい時、おばあさんに行儀作法などこまごま注意されたでしょう』

教育相談余話 ①

姿を見せないお母さん

「あまり細かいことを注意していると、人前でうかつに言ったりしたりしてはならないという警戒が先にたつて、自分で自分にストップをかけます。例えば、PTAの会の時など、他人が事もなげに発言していることがよく分からないことがあります。知能そのものはおちていないのですが、考える脳の働きにストップをかけているのです。会がすすんで帰りがけによい考えが浮かぶことがありますか」

「全くおっしゃる通りです。『間違いないように気を付ける』

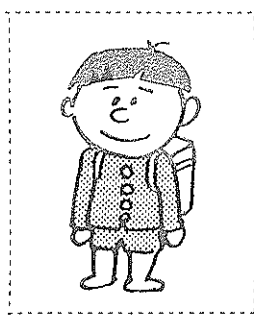
「ことはよいことですが、絶対へまをするな、間違つたらたいへん、となる、さわらぬ神にたたりなし、何もしないのが安全と、無難な道を選びます。家で勉強していると、必ずお母さんがそばにいる。間違つたらたいへんとなると、PTAの会でお母さんの状態になります。」

「自分から脳の働きにストップをかけているのですから、頭が働きます。よく分かります。分からないのでお母さんに申し訳けないとなると、自分がなまけなくあります。なまけなく思いたくない」となる、ますます頭が働かなくなり。

「ザリガニやカエルをとるところにはお母さんがいません。頭がよく働いて名案が浮かび、じょうずにとれます。ますますおもしろい。目が輝いていきいきしているのはこのときだけです。かわいそうです。」

「ほんとうにそうでした。分かりました。細かいことをあまり口やかましく言つてはいけません。あたりの感じは強くなります。あたりの前のことなのです。みんなの前に

「自分のお母さんが出たら、私もそうです」と大半のお母さんが言うはず。そうすると、PTAの会も楽な気持ちで参加できると思います。」



「そして、子どもは『百点』のときも、そうでないときもある、次第によくなれば結構、なご一つ一つの落ちつきが出てくる。こうなつたとき、子どもの態度も変わってくるはず。なかには、母親の態度が変わっても、子どもは変わらない場合もあります。それは、子どもが生まれて数年、母親の完全主義がしみこんでいて容易に変わらない。自分では直せないからです。そこで、親などの暖かい援助（根気）で、何のためらいもなく話せるようにしむけてやるのが絶対必要です。」

「人間そのものがそのようにつくられていないからです。『学校の先生は、よくやっています』と言ってくれますが、私のみるころではよそのお子さんのようにはできていないと思います。」

「これは、母親みんながもっている感じで、決して変わってはいけません。よい子になってもらいたいという願いが強ければ強いほど、この感じは強くなります。あたりの前のことなのです。みんなの前に

「自分のお母さんが出たら、私もそうです」と大半のお母さんが言うはず。そうすると、PTAの会も楽な気持ちで参加できると思います。」

南国市教育相談所
高石文一